

ARTKISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2006.秋号] **vol.30**

天才アラーキーが やって来る!

第18回熊本市民美術展 熊本アートパレード

審査員: 荒木経惟 (写真家)

1940年東京都台東区生まれ。1963年千葉大学工学部写真印刷工学科写真映画専攻卒。株式会社電通に入社。1965年新宿ステーションビルにて初の個展「さっちゃんとマー坊」。1971年結婚、妻陽子さんとの新婚旅行を撮った「センチメンタルな旅」で写真家として独立。以後、カルティエ財団現代美術館、原美術館、台北市立美術館、東京都現代美術館など各地で個展を開催。写真集など著書は250冊を超え、国内のみならず、世界各国で活躍している。

荒木経惟講演会「アラーキー、愛を語る」

11月11日(土)場所:熊本市現代美術館ホームギャラリー
<入場無料> 時間:14:00~

「隣のすみちゃんコンサート 坂本すみ子ー優しさをあなたに」

11月19日(日)場所:熊本市現代美術館ホームギャラリー
<入場無料> 時間:14:00~



Museum information

夜間開館日の映画特別上映 2006.8.12-13

夏の夜の恒例となってきた22時までの夜間開館を今年も実施しました。実施に合わせて、19時よりホームギャラリーにて映画を上映。12日は「A.I.」(2001年 アメリカ)、13日は「天と地」(1993年 アメリカ)でした。普段は読書スペースであるホームギャラリーが、ゆったりとしたソファに座って鑑賞できる映画館に。みなさんくつろいで映画を楽しんでおられました。(A.T)

*大好評をいただいております「月曜ロードショー」は、当館アートロフトで、毎週月曜日開催しております。14時/18時の2回上映、無料。スケジュールはHP、館内掲示板、チラシ等をご参照下さい。



佐喜眞美術館のコレクション 2006.8.20

沖縄県の佐喜眞美術館の館長である佐喜眞道夫さんが、コレクションを始めたきっかけから、美術館設立と活動の根底にある、沖縄での戦争、基地という現実をどのように伝えていくか、丸木位里・丸木俊作の《沖縄戦の図》の作品を中心に、その思いと行動の形をお話くださいました。(Y.H)



CAMKレクチャーカレッジ③ 「欧米の生人形コレクション」 2006.8.27

「欧米の生人形コレクション」について、当館館長南高宏がレクチャーしました。欧米の博物館には多くの生人形や開国直後の日本を伝える作品などが収蔵されています。前回の「生人形と松本喜三郎」展に引き続き、「生人形と江戸の欲望展」でも、オランダ、イタリアに残された作品を紹介しましたが、その収蔵された経緯、そこで発生した文化交流などについてお話ししました。

CAMK人形劇 「みにくいあひるの子」 2006.9.2

「生人形と江戸の欲望展」にちなんで行われているCAMK人形劇公演第2弾、人形劇ファンタジアによる「みにくいあひるの子」が上演されました。会場は200人以上の家族連れで賑わい満員御礼状態。そんな中、子どもたちはくるくる動く人形たちと一緒に、笑ったり悲しんだり大忙しでした。劇は満場の拍手で幕を下ろし、最後に、人形劇ファンタジアさんがたくさんの人形たちを全て一人で演じられていたということが分ると、またまた拍手の嵐が巻き起こりました。始終暖かい雰囲気にもまれた、とても楽しい人形劇公演でした。(S.Y)



風鎮祭(高森町)に行ってきました！ 2006.8.18

生人形の原点ともいえる「つくりもん」の祭、高森町の「風鎮祭」が盛大に行われました。台風接近の雨模様となりましたが、生活に根ざした伝統文化を守り続ける、高森町の皆さんの心意気に、今年もまた圧倒されました。すばらしい「つくりもん」の作品の中から、今年の熊本市現代美術館賞に下町2組の「犬猿の仲」を選ばせていただきました。来年の「風鎮祭」も今から楽しみです。(館長・南嘉宏)

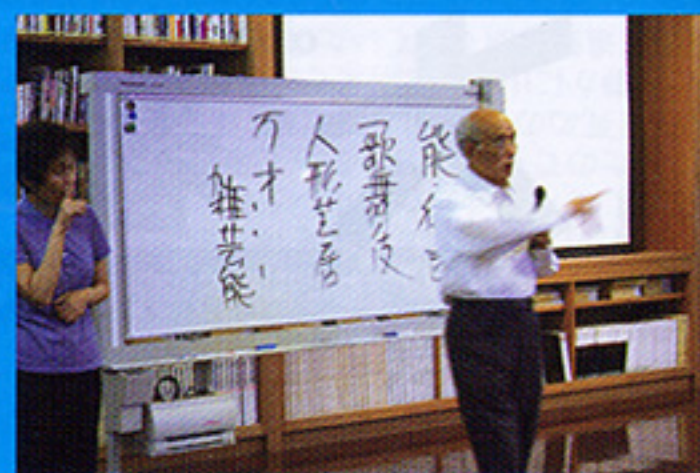
八朔祭の大造りもの審査 2006.9.3

熊本県山都町の八朔祭の大造りものを見に出かけました。今年は12点の引き回しが行われ、そこには小学校2校も初参加。後継者不足が心配されるこの伝統行事も、若い世代へ少しずつ引き継がれていくことになりそうです。力作が並ぶなか、今年の熊本市現代美術館賞には、多様な素材で巧みに構成した、浦川連合の「サア、ソウリどうする日本」(サソリ)にさせていただきました。(Y.H)



沖浦和光講演会「悪所」という名のコスモロジー 2006.9.10

桃山学院大学名誉教授の沖浦和光(おきうら・かずてる)さんの講演会が行われました。沖浦さんは、俳優三國連太郎さんとの共著もあり、アジア全域の芸能について研究されています。今回の講演では、おもわず聞き入ってしまう話術と関西弁の軽妙なリズムにのりながら、日本人の起源について、芸能に携わってきた人々に備わるシャーマン性について、九州の役者村について、遊廓と芝居町の距離の近さ、千利休の切腹の本当の理由、「竹取物語」を薩摩隼人の歴史とあわせて紐解く解釈など、様々な方向から芸能を担ってきた人々についてのお話を展開されました。80歳の瘦身に並々ならぬエネルギーを漲らせて、講演時間中ずっと立ったままで、ホワイトボードに次々とキーワードを書き続けながら、観客に呼びかけるようにお話をされる姿がとても印象的でした。(H.T)



ファミリー・ツアー 2006.8.12/9.10/10.1

家族で楽しく展覧会を探検するのがファミリー・ツアーの醍醐味です。生人形の世界をたっぷり堪能していただけるよう、スタッフも入念に準備して取り組んでおります。展示作品のなかで小さなお友達の一番人気は、ライデンの動物小人形のコーナー。みなそれぞれのお気に入りの動物をみつけてくれたようでした。ファミリー・ツアーは、0歳の赤ちゃんの参加も多いのも特長ですが、不思議なことにぐずったりする赤ちゃんが3回の開催で一人もいませんでした。これも生人形不思議なちからなのでしょうか！?(A.S)



中学校の社会体験学習「ナイス・トライ」 2006.9.12-9.14

熊本市現代美術館は、これまで、中学生や高校生による職場体験学習生の受入れを毎年行ってきました。今回、熊本市立力合中学校が行う社会体験学習「ナイス・トライ」の体験活動場所に熊本市現代美術館を希望した同校2年生3名(小川紗季さん、米村理子さん、坂口滋弘くん)が、3日間、美術館で様々な業務に「ト・ライ！」しました。

体験学習は、館内の清掃作業から始まり、展示監視員業務、受付案内業務、学芸員指導による美術図書整理・事務局での事務作業などを行いました。初めは少し緊張ぎみの3人でしたが徐々に慣れ、元気な挨拶の声と、真剣に仕事に取り組む姿が特に印象的でした。

体験学習終了後に、3人に感想を聞いてみました。「毎日集中して取り組みました。この体験を活かし、何事にもがんばりたいと思います」(坂口くん)、「仕事の責任の重大さやお客さまへの心遣いなど多くのことを学びました」(小川さん)、「将来は美術関係の仕事に就きたい。美術館で学んだことは夢に向かっての第一歩です」(米村さん)

美術館に爽やかな風を呼んだ小川さん、米村さん、坂口くんのナイス・トライ！でした。(主査：今村和也)



蝶の忌お話会 2006.9.17

新市街アーケード上にある海老原喜之助の壁画《蝶》につきましては、毎年美術館では見学ツアーを行っておりましたが、現在、熊本学園大学に移築が行われているため、今回は、美術館内で「蝶の忌」記念のお話を開催しました。台風のなか駆けつけてくださいました熊本学園大学の目黒常務理事にもごあいさつをいただき、海老原喜之助の油彩作品をスライド鑑賞しながら、海老原が熊本に残した足跡に想いをはせました。

GIII vol.41 盆栽という名の宇宙 (2006.5.31-7.30)

現代美術館の恒例となった「盆栽という名の宇宙Vol.3」が開催されました。先月の台風の影響を受けて手入れが大変だったという声も聞こえる中、それでも日本盆栽協会熊本支部の皆さんが丹精込めて育てた銘品33席が並び、五葉松の力強い幹と緑の葉のコントラストの美しさを始め、枝の先まで神経の行き届いた熟練の技と自然のおりなすまさに「芸術品」を心ゆくまで堪能できる空間となりました。(E.Z)



SUITOITTO KUMAMOTO

【スイットト・クマモト】



本年度のスイットト・クマモトは、熊本の華人インタビューです。(インタビュー・構成：籠座江美)
*いける=花を生かす、ことと考へ、ここでは「生ける」と表記します。

【真生流編】

お父様が華道家だったため、自然と幼い頃から花に親しみ気付けばいけばな始めていたという池本翠郊先生にインタビュー。幼い頃やめたいと思ったことはないですかとの問いには、「それほど厳しく指導されていたわけではありませんから」と笑いながらも「好きだったから続けてこられたのでしょう」ときっぱり言い切られるところに、普段はいつも笑顔の先生が見せる生け込みの時の厳しい表情の意味がわかったような気がした。線の美しさ、明快優美な作風が特徴の真生流だが、生ける際にはいつも空間をいかに生かすかに気を配っているという。「命ある花を切って生けるわけですから、その花を冒瀆するような生け方はしないように心がけます」とおっしゃる先生は椿や竹がお好きとのことだったが、すっきりとした線の中に優しい花びらを開かせるグラジオラスのようだと思った。



熊本の華人展vol.2生け込み風景

【専正池坊熊本支部編】

お話を伺ったのは、明るい笑顔が印象的な坂田幸雪先生。池坊から枝分かれした専正池坊は、立花からお生花、現代花、自然花、造形、フラワーアレンジに至るまで花の形が多いのが特徴とのこと。「若い方はフラワーアレンジから入られる方が多いですが、ある程度技術を習得すると立花やお生花の中にわび・さびを感じて入られる方もいらっしゃいます」という言葉に、なぜ今日までいけばなが続いてきているのかのヒントが隠されているような気がした。楽しく生けるのがモットーですとおっしゃる先生から「自然を大切にしましょう」といいながらその自然から花をいただいてきているわけですから、いけばなとはある意味残酷な行為だとも思います」という対極にあるような言葉を聞くと、だからこそ、自然を思いやる気持ちを忘れず楽しく生けることを伝えていきたいと思っていられるのだと強く感じた。水揚げに苦労しますがと言いつつ生けてしまうお花はバラとのことだったが、先生には大輪のひまわりがびったりだと思った。

*「熊本の華人展vol.3」は、前期12月1-3日、後期12月6-8日の開催です。お楽しみに！
(会場：熊本市現代美術館 企画展示室Ⅰ、Ⅱ)

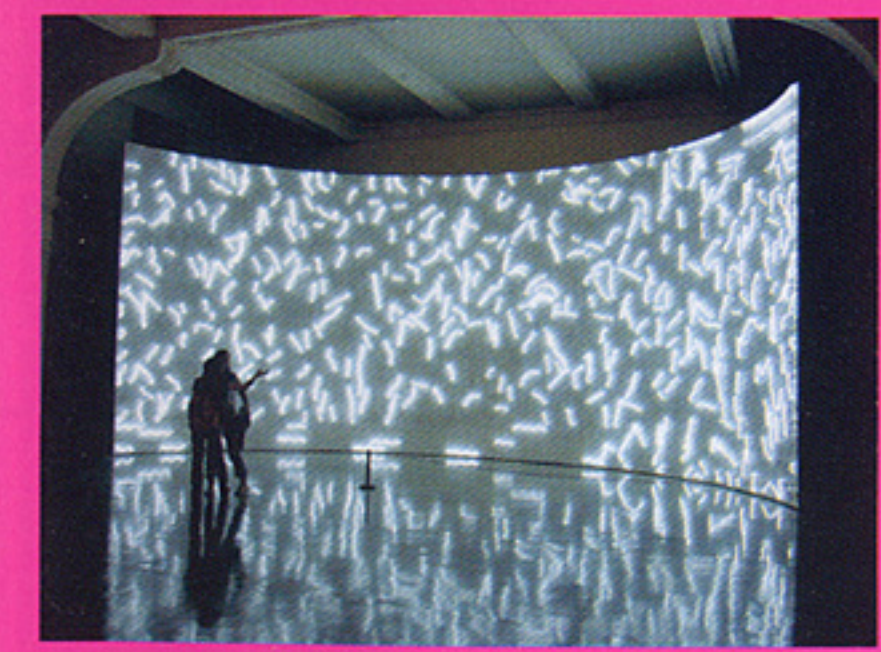


熊本の華人展vol.2生け込み風景

WORLD NEWS

第6回上海ビエンナーレ 2006.9.6-11.5 上海美術館

今回は、「超設計-Hyper Design-」のタイトルのもと、上海美術館の副館長のチャン・チン(Zhang Qing)ほか5人のキュレーター・チームによって選ばれた91人のアーティストが参加した。デザインと社会の関係性に焦点を置き、「デザインと想像力」、「日常生活の実践」、「歴史の未来的構築」の3つのテーマが設けられていたが、多様な作品が展示され、各テーマと作品の結びつきはあまり明確ではなかったように思われる。「デザインと想像力」のなかのシェン・ファン(Shen Fan)の作品は、5x10メートルのスクリーンに、中国楽器の音の長さに対応した長さのネオン管を配置したインスタレーションで、音や光、コンセプトに広がりを感じられる作品であった。全般的には、中国の作家を中心とする多くの作家の新鮮な作品が並び、現代のアートの一側面を捉えていたといえるだろう。(Y.H)



Shen Fan(Landscape: A Tribute to Huang Binhong)

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006 2006.7.23-9.10

妻有には、「経庭(みちにわ)」といって、家と道路の間に花を植える習慣があるそうです。今流行りのガーデニングのように洗練されたものではありませんでしたが、サルビアやハゲイトウなどの色とりどりの花々が、訪れた人々を歓迎してくれているようでとても微笑ましいものでした。今回のトリエンナーレでは小白倉集落という約30戸の小さな集落を会場に、ベテランから若手までの21人のいけばな作家たちが週替わりで個展を行ないました。公開制作による展示のあと、週末には作家本人によるトークも開催されました。大地のエネルギーに満ち満ちた空間に負けない個性的な作品があちこちに点在していて、作家の自然の素材そのものに対する真摯な態度と、その素材に果敢に挑戦する真剣勝負の様を楽しむことができました。(E.Z)

今回で第3回目を迎えた妻有トリエンナーレですが、圧巻だったのはクリスチャン・ホルタンスキーとジャン・カルマンによる「最後の教室」という旧東川小学校の体育館・校舎をすべて使った巨大なインスタレーションでした。3階建ての校舎のフロアごとに表情が変化していき、科学室(2階)、音楽室(3階)に我々が共通して持つイメージを特化させ、強烈な印象を残す空間を作り上げていました。また、今回のトリエンナーレのみどころは、ランドスケープに溶け込んだ中・大型作品で、妻有の美しい景色や素材を体験させるものが多く見られました。土砂崩れなど災害の跡がいまも多く残る妻有の景色と、町なかの無料休憩所で、自宅から持ち寄った御手製の胡瓜の浅漬けを1本まるごと手渡してくれた老婦人の温かな笑顔が心に残りました。(H.T)



クリスチャン・ホルタンスキー + ジャン・カルマン
《最後の教室》の「音楽室」



景山健(ここにおいて 津南 2006)



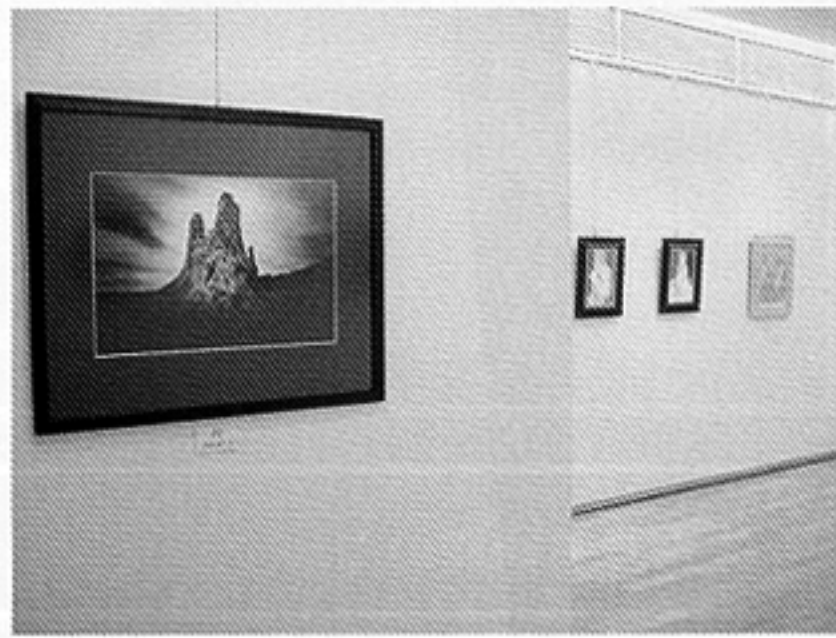
山田真規(ブランコはブランコでなく)



第6回銀座ギャラリー画友展 - MSBとその仲間たち

2006.10.10-10.15 ギャラリー&カフェTOTO 熊本市上通町5-46.3F TEL352-7162

武蔵野美術大学熊本支部OB(MSB)と、彼らを中心に行われている美術の勉強会の仲間たちで、熊本県内のギャラリーを借りて毎年行っている展示会の第6回目。今回は平面の小品を中心に17名の有志で行われた。メンバーは主に50代~60代の方で、油彩、水彩、写真、彫金、素描と、作品のジャンルは多岐に渡っていた。中村由紀子さんの写真作品「刻」は、朽ちかけて岩に見紛うような老木の幹と、空を過ぎ去る雲の流れが対称をなしており、その迫るような一瞬がモノクロ印刷紙に焼き込まれていた。展示全体の落ち着いた雰囲気と、作品一つ一つから感じられる若々しさが印象的な展示会であった。(S.Y)



第56回 杏美会展

2006.10.11-10.16 アートスペース大宝堂 熊本市上通5-6 TEL354-2155

ギャラリーに入って真っ先に、会場に漂う優しい空気を感じた。杏美会に集う方の職業は医師。最初に感じた、あの温かい穏やかで優しい空気は、大切な時間に大切な絵を描く、そのような気持ちをもっと感じさせるものであった。日常のひとコマや旅先と思われる風景画、静物画に抽象画。色彩もとても個性的で、個々の感情や絵筆をとるときの喜びが伝わってきた。その中でも、福田瑞男さんの河童の切り絵は、シンプルな構図に親子の愛情がとてつもないユニークな作品であった。杏美会は坂本善三を指導者として、三浦洋一さんをはじめ数名で結成した会である。毎年春と秋の2回、展覧会を開催。秋の展覧会だけでも56回を迎えるという。職業だけでなく、この会の2代目を継がれた方もいらっしゃるという伝統的なグループである。(N.I)



第26回 兼城昌山とそのグループ展<書>

2006.7.19-7.23 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本県書道連盟会長で毎日書道展審査会員の兼城昌山さんが、公民館やNHK、熊日等の文化教室で学ぶ会員48名とともに、年に一回発表する書道展である。漢字、仮名作品も交えているが、甲骨文や金文などを素材とした一字の大字書が中心になっているのがこのグループの特徴である。出品者は初心者から30年のベテランまで。年齢は20代から最高齢者91歳という。頑張っておられる高齢者に敬意を払いたい。出品作の中では、中央展を目指して練り上げたと思われる大字書が、やはり安定感、充実感、躍動感など精彩度が違うと感じた。(T.M)

合同いけばな展

2006.8.31-9.3 熊本県立劇場 熊本市大江2-7-1 TEL363-2233

第48回熊本県芸術文化祭共催事業として合同いけばな展が昨年と同じく県立劇場で開催。ケイトウや吾亦紅といった秋の花材がふんだんに使われ、残暑厳しいひとときを忘れさせてくれるような作品の数々が並んでいた。そんな中カラフルな花器を使い、去り行く夏を惜しむような、夏の思い出を感じさせるような作品も見られた。同じ花材でも使用する花器、他の花材との組み合わせや色の合わせ方によって花の表情ががらりと違ってみえることにいけばなのおもしろみを深く感じた展示会だった。(E.Z)



第34回硯心会書作展

2006.8.23-8.28 アートスペース大宝堂 熊本市上通5-6 TEL354-2155

熊本大学書道部卒業生を中心に結成した硯心会(上田桂峯会長)の書展である。43人が、漢字、かな、調和体書など自分の想いを自分なりに表現して多彩である。今回も釈文に作者の想いをコメントしてつけてあるのが良い。コメントはなくても作品自体が見る人に訴えかけてくるものであるが、やはりコメントによって作者の作品に込めた想いを説明してくれるからわかり易いのである。恩師の斎藤鶴跡元同大教授は「竹篔」を青墨で篆書で書き清楚である。森山淡草さんは「璽」を金文(帛書)でパネルにし、徳永鶴鶴さんは「禪」を草書体で見せている。兩人とも一字書の表現として会場にアピールしているようだ。柏原雲堂さんは「般若波羅蜜多心経」を端正な楷書で歌写している。三嶋天鴻さんは「横井也詩・偶成」を大作の軸にしていた。「物事にこだわらぬ自適の清貧生活をうたい…」とコメントしている通りに書も興に任せて運筆し、変幻自在である。徳田翠雨さんは虎の墨画に八木重吉の詩を添えていたが、書作家としての悩みを荒いタッチの筆さばりで運筆している。高津魯水さんは「夢を忘れずゆつくり行こう」と素朴な線刻で小品だが明るい。(S.K)

9人の島

2006.9.26-10.1 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本イラストレーターズクラブの9人による展覧会。「生きるってなんだろ?」をテーマに、平面、立体で作品を表現。時代を反映し、児童虐待・ペット虐待をテーマに扱う作品もあり、自他ともに自由に生きる権利を大切にしたい、というメッセージを発していた。また、吉原尚子さんの「ルシの出産」のうち、絵本には、彼女の息子とルシ(猫)との出会い、そしてルシの出産までの話が描かれており、家族の一員として愛されて生活している様子がリアルに伝わってきた。どの出品作も手作り感あふれ、おんな達が笑顔で集いながら「平和で幸せが一番よね!」と会場をつくりあげたような和やかな雰囲気を感じた。(H.T)



第24回 書道 溪風会選抜展

2006.9.12-9.18 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

合志市在住で、仮名書道界の重鎮である川俣深石さんが主宰する溪風会の選抜展で、熊本県芸術文化祭参加行事である。会員約250名の中から今回は54名の選抜である。選抜展は「聯落ち(れんおち)」以上という規定だそうで、作品の大きさは粒を揃えた感じであるが、内容は細字仮名、中字、大字仮名、調和体(漢字仮名交じり文)と変化に配慮されていた。表装も、会員展に比べるとカラフルになるとはある出品者の話。選抜展だけに流石にレベルは高い。特に細字仮名は手慣れたものである。最近全国的に力を入れた「調和体」については、歴史が浅いだけに多少の戸惑いがうかがえる。(T.M)

第48回熊本県芸術文化祭参加 第42回近代詩文書作展

2006.9.26-10.1 熊本県立美術館分館 熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本県芸術功労者である井上亨子さんが主宰する11人の会員が、漢字、かな、近代詩文書など一人4-5点ずつを展示した。井上亨子さんは蘇東坡の赤壁賦(せきへぎのふ)の臨書に、島崎藤村の詩や若山牧水の歌を元気な筆使いで大作にしていた。山戸美津恵さんも小野道風の屏風土代(びょうどだいの)臨書に島崎藤村の「椰子の實」を伸びやかな線で示していた。高木昭子さんは「佛自然」を豪快に大書し、山頭火の句「土蔵そのそばの柚子の實も」は文字の大小を調和よく軽快にうまくまとめている。谷口公子さん、東柳泉さん、米村夫仁子さんの3人は、湯筆のきいた隷書の漢字大作が新鮮に見えた。田中順子さんは山本太郎の詩や吉田一穂の詩を身障者でありながら不自由な手でゆつたりと大らかな線で書いている。他にかなの古典臨書に創作を折帖にした作品などもあり会場は明るく多彩である。金子蘭亭さんや安達蕨南さんの賛助出品は特に光って見えた。(S.K)

西山敏雄個展

2005.10.1-10.9 三点鐘 熊本市手取本町3-8有明ビル TEL326-3040

東光会や銀光会で活躍されている西山敏雄さんの個展。今回は油彩20点、水彩4点が出品されていた。主題は、海や湿原を描いた風景画が多く、他にも力強いバラの静物画や肖像画があった。西山さんは絵を描く時、デッサンはせず、対象を見た際に自分の心に湧き上がった感情を、色と筆触にぶつけるのだそう。地がうす塗りであるのに対して、対象が厚塗りマニエールで描かれているので、絵にある種の緊張感が生まれている。油彩、水彩ともに、沈んだ色調のベースに少量の鮮やかな色彩が配されており、中でもインドの女性を描いた「婦人像」。「サリーの女」は、美しいサリーの衣装と背景のコントラストが美しく印象的であった。色彩の魅力がいかんなく発揮した展覧会であった。(A.A)



RKK学苑 火曜水彩 みずゑの会 作品展

2006.10.11-10.20 画廊喫茶南風堂 熊本市北千反畑町5-13-1F TEL3343-9664

みずゑの会は毎週火曜日に雨森三郎さんを講師とした水彩画の教室である。毎年この時期に展覧会を行っているそうだ。12名のうち9名が男性で、中には定年を機に興味として始めた方もおられるとのこと。雨森さんの指導の元、みなさん楽しく制作されているそうで、静物を中心としたモチーフがそれぞれの感性を大切にしつつ、丁寧に描かれていた。薄いブルーや淡いピンク、グリーンなど明るく爽やかな色使いと水彩の持つ独特な柔らかな水色の持つ独特な柔らかな水色が見る人の気持ちを優しくしてくれるようだった。(A.T)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

- ◇生人形と江戸の欲望展アンケートより
 - ・パンフレット等の写真で見ると現実に見たときの迫力の違いに驚いた。(21歳・男性・熊本県)
 - ・めっちゃめっちゃ生人形がリアルでした。髪の毛とかさわってみたくかったです!!! (14歳・女性・熊本市内)
 - ・迫力ある作品群、リアリティー...とても一言では表せないものでした。日本を代表する作家(生人形師)が二人とも、この熊本の地から誕生した事をとてうれしく思います。(45歳・女性・熊本市内)
 - ・動物達の人形が動きがあり体毛があり、とてもリアルでかわいらしかったです。(15歳・女性・熊本市内)
 - ・広い空間の中で展示されてゆっくり観賞することができました。熊本が生んだ素晴らしい方の作品紹介をこれからもやって欲しい。配列は特によかったです。(63歳・男性・熊本市内)
 - ・普段見ることのできない作品をたくさん見れてよかったです。女性の人形がなかったのはなぜか気になった。(15歳・女性・熊本市内)

- ・生人形の大家2人が熊本出身というのはいまもって県民の宝にすべきです。カタログ本の館長の紹介文は正に同感しました。猿蓑町のビデオも全員が見て行けば、理解度も倍増するのにと残念です。(53歳・女性・熊本市内)

☆アンケートに寄せられた質問に館長がお答えします

「生人形と江戸の欲望」展の展示について、東京からの40代の女性の来館者から、展示会内に展示した「春画」の局部が隠されていたことに対し、説明を求める質問をいただきましたので、お答えしたいと思います。すでに「春画」は一般書においてもそのまま印刷され販売されるという傾向があり、また国内の美術館においても少数の作品展示において、局部を隠さず一般に公開した例もありますが、今回はあからさまにそれを見せるといってではなく、あえて「紫」の布の小片で覆い、淫靡さを強調する展示方法を取りました。「欲望」とはつかみどころのないものです。「見せること」、「隠すこと」、一方方向だけでなく、真理を浮上させる、さまざまな回路の可能性をこれからも探っていきたいと思っております。今後とも皆さんからのご意見、ご質問をお待ちしております。(南島宏)

ooh-vanguard! 大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

今回が第1回目となるシンガポール・ビエンナーレが9月4日から11月12日まで、シンガポール各所で開催されました。自転車館長(誰もそう呼んでくれないので、自分でいうのです)は、愛車「つぶちゃん2世号」(エスプレッソ20)を日本から持ち込み、赤道はすぐそこ、猛暑のシンガポール・ビエンナーレを体いっぱい堪能してまいりました。第1回目のアーティスト・ディレクターは日本の南條史生氏で、テーマは「belief」。多民族の集合体であるシンガポールは世界そのものの縮図であり、現代美術を通して、人間と人間、人間と社会の分断してしまつた信頼感、都市そのものの中に回復しようとする試みでした。すでに別の国際美術展で紹介された作品も少なくありませんでしたが、このビエンナーレを人間と機械のちょうど中間に位置する「自転車」で回りながら、新鮮な人間と都市、そして現代美術の関係を体感することができました。皆さんもこれからはぜひとも自転車に乗って、美術展を回りましょう。美術館と街の質感が一気に変わりますよ。

第3回 自転車漫遊記:自転車館長、シンガポール・ビエンナーレを走る!(南島宏)



東林院 インスタレーション



自転車館長、愛車「つぶちゃん2世号」と



「なんだかよくわからなかった、オープニング(パフォーマンス)に参加して」

はじめまして、よろしくおねがいします!

芦田彩葵(あした・あき)学芸員

◎美術館にくるまでの経緯と専門分野など
幼い頃から、美術館という空間が好きで、学芸員になりたいとずっと思っていました。
そのために、神戸の大学、大学院で美術史を専攻しながら、大阪の国立国際美術館で学芸員のインターンをしていました。
今回、日本で一番元気があると言われていた美術館で働くことになって、幸せです。

◎好きなアーティストと作品
大学で研究していたマーク・ロスコ(当館上階にあるホテル日航のエスカレーターの壁にポスターがあります!)。
ユジャン・パフチャルの写真。彼の写真は、光と闇が織り成す世界が神秘的で非常に官能的。そくそくします。
小谷元彦。特に「9TH Room」という作品は、自分が埋没していく感覚がなんともいえないです。
また、日本に昔からある、生活に根ざした遊び心と繊細な美を伝える着物や蒔絵、和菓子も好きです。

◎読者のみなさまへの一言
ご縁があって、熊本にやって参りました。飛行機から見た熊本は、緑が濃くて大変美しかったです。
熊本は、ご飯もお酒も美味しいので、それを堪能しながら、早く熊本に溶け込んでいきたいと思っています。宜しくお願いします。
また、猫が大好きですが、熊本に来てからまだ3回しか目にしておりません。もし美猫が近くにいるという方は、どうぞご一報下さい。

命の花壇に新しい花が加わりました
CAMK 玄関にある命の花壇の整備に、熊本養護学校の先生方が来て下さいました!! 今回植えられた花はポーチュラカとインパチェンスです。毎朝の冷え込みにも負けず、元気に玄関を彩ってくれています。(2006.9.29より)

井手記念室展示替えしました
このたびの展示は秋・冬の風景画に焦点をあてております。記念室では初公開となるスケッチブックですが、スケッチならではのびやかな線の動きや、息遣いを感じさせるような筆致のスピード感がみどころです。

最近思うのはどうして自分は絵を描いているのだろうか? って事です。
とても近い友人の大工さん(我が家の廃屋の民家を修復してくれたKさん)がこの夏に肺炎のため、56歳で逝きました。
3月に調子が良くないと言って検査入院して、末期の癌を告知され、その後の彼の行動にはすさまじいものを感じました。自分の病気より、人間関係の修復を急いだのです。
その上、5月に自ら、近しい友人を本人の実家(静かな山間にある農家)に招いて庭でお別れ会を企画したのです。その時、本人はもう最悪のコンディションなのに、その一週間前から家の前の川で岩魚を釣ったり、山に山菜を探りに行こうとして、ほんの数メートル山に入っただけで、動けなくなって、一緒に探っていた友人に「なんで体が動かないんだー。」と言って、でも懲りずに少しずつ探って当日に山菜、岩魚などを揃えたのです。その日は、風は強かったけど田植え日和で、実家も田植えの真っ最中で、僕らはのん気に彼の庭先で炭火をおこして岩魚を焼いたり、肉を焼いたり、山菜をてんぷらにしたり、僕が庭の山からの引き水の生け簀(いけす)にいる生きた岩魚のわた(内臓)をとってると、座ってられないほど弱ってるKさんは、はいずって来て、「それじゃー魚はさばけん!」と言ってピチピチはねる岩魚の頭を包丁の背のところで一撃くらわして、お手本を見せるのです。Kさんの死と岩魚の死が重なりあって、僕は頭がクラクラしてしまいました。なんて強い人だと思いました。それから彼はその魚を炭火で焼いて、日本酒に入れて骨酒にして、肉を少し食べ、くい飲みでその骨酒を一杯のみ、「美味い」と言って後はもう食べる事ができなくなり、「ほら、見ろー、山の新芽の緑がきれいだから、あれは梨の木だ!」と笑いながら話して、暫くしてもう座ってられなくなり、「あんたはそのまま続けてくれ、オレは横にならして貰う。昔の声を聞いているから...。」と言って縁側にひいた布団に横になり、そのうち寝てしまい、その間、僕らは彼の義理のお姉さんに山菜取りに連れていってもらい、夕方彼の家に戻るとKさんは縁側の座椅子に座って出迎えてくれていて、参加した友人らに「今日はありがとう、これでもうすっきりした。お別れだ。」と言ったのです。その2日後、彼は急変して再入院して抗がん剤治療をしていたのですが、回復せず、退院できずに病院でなくなりました。5月に一度、Kさんが最初の抗がん剤治療で回復して退院して来てふらっと、僕のところを顔を見てくれました。「ホンダ忙しいか? やる事なくてちょっといいか?」と言って来たのです。それから二人で半日ユックリ話をしたのですが、会話の流れで、僕は彼に「死ぬの怖くない?」と聞いたら彼は「まだ実感がわかない、ただ死ぬんだったら静かに山の方に消えて行きたい。」と一言、答えました。
20年前に遠野に旅で来ていた僕は、彼の実家のお祭りに見に来ていて、「神輿かつく人いないからからあんた手伝え!」と最初に声をかけて貰って以来、そのまま現在まで付き合ってきて、遠野での最初の友人であり、出会ったはじめの時から涙みのある尊敬する「山の人」で感じだったので、その死に際の鮮やかさにただ感服しました。自分が同じ境遇だったら、わめき散らして、泣きじゃくって、最悪の醜態だろうと思うと、「なんでオレ絵描いてんだ?」って突きつけられてる様で、100の理屈より1つの事を分かって何だろうって、その事ばかり近頃考えています。Kさんの葬式で頂いた花を、写真の油彩画で16年ぶりに描いてみました。一つはユリを梅雨明けの空を背景にして、もう一つの菊は彼が修復してくれた我が家の民家の土間で...。久しぶりに個としての絵を描いた気持ちになりました。

Q.4今後予定されている展覧会を教えてください。また作品はどこで見ることが出来ますか?

今の所、常設では岩手県立美術館に展示してあります。
個展は、今年の6月にギャラリーGANで開催しました。来年6月に銀座のギャラリー・ブスで新作油彩展の予定です。

種類によって飛び方が違うので...。それから現場でスケッチするためにジッと杉木立などを見つめていると、ドローイングのアイデア(とても感覚的でうまく説明できないです。)が浮かんで来ます。残念ですがカメラを持参してないので、撮れないのですが、でもまたそんな風景に出会えると思ってのん気に考えてはいるのです。それから、かみさんが盆栽に凝っていて、その花々が徐々に咲いてそれをスケッチしたり、油彩画にしたりしていると、2、3日かけて描いている花がドンドン変化して行って、信じられないのですが、ほんの1、2時間くらいで思いっきり茎ごと動くのでびっくりしてしまいます。この歳になって恥ずかしい話で、こんなにじっくり花を見たことがなかったもので...。
それから暮らし的には今年はやたらと蛇を見かけます。我が家の屋根裏に野鼠がごそごそしていたずらして困っていたのですが、ある日ユックリと青大将が軒を伝って茅葺の屋根に入って行くのを偶然見ました。そうすると、今まで、うるさかった天井がとたんに静まりかえって、何か家がドッシリとした趣になりました。まるで、囲炉裏に神楽を祭った時のように、安心感を抱えたのです。そんな感覚は多分また絵画表現に変化を与えるきっかけになるように思います。

Q.3読者にメッセージをおねがいします。

皆様にもっていただく良い機会になったのかな、と嬉しく感じております。
11月11日から、熊本市民美術展「熊本アートパレード」が開催されます。審査員は写真家のアラウキこと荒木経惟さんと、テーマは「優しさ」です。今回からリーフレットのリニューアルが行われ、アラウキファン必見のパンフレットに仕上がる予定です。お楽しみに!

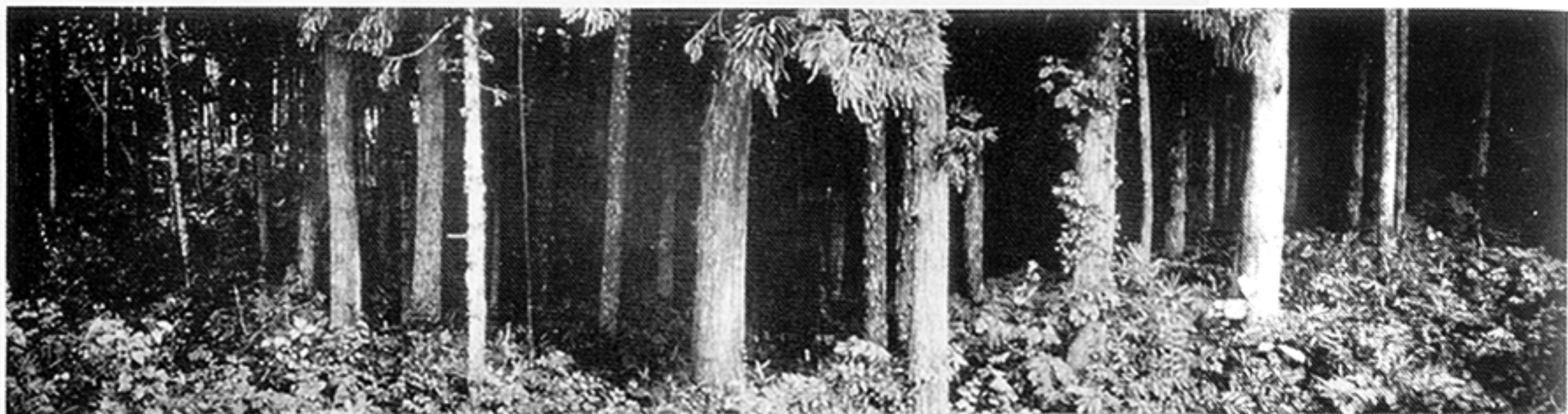
編集長 富澤治子



アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第3回/本田健(ほんだ・たけし)さん(from日本)
1958年山口県生まれ。1987年から岩手県遠野に移住。
岩手県遠野を拠点に活躍する本田さんが、所蔵作品をみるためのたくさんのヒントをお話してくれました。



《山歩き・八月》2000年、チャコール・ペンシル、紙、パネル、200.7x762.0cm、熊本市現代美術館蔵

Q.1《山歩き・8月》へのコメントをお願いします。

この作品の写真は遠野の我が家から少し離れた山崎地区の里山で取材しました。山の入り口(梢)で、梢とは、昔から、人と神、人とけものが出会う場所で、結界のような意味でもあり、山が神聖な意識を持っていた頃の空間だと考えました。写真は35ミリのフィルムで横に2カット撮りました。左は沢で、右が山に入ってゆくように構図を選び、一番手前の木々は実物大となっています。そしてこの絵は一年間ニューヨーク滞在中のブルックリンのスタジオで10ヶ月間かけて仕上げました。横にこれだけ長い作品は初めてで、自分の中に過去の日本画のイメージがあったのも確かです。

Q.2本田さんは自宅の裏山や身近な草花の景色を作品の題材として取り上げていますが、最近最も気になる題材はなんですか?

ドローイングに関しては、基本的な興味は余り変わりませんが、ただ山の本木に当たる光とその影の見え方にはいつも気にかけているのですが...。
今油彩画をやっている、外でスケッチを一日中やっていると、昆虫や鳥などの動きが活発なのに驚いています。特に蝶は面白いですね、単独の時とか複数の時とか、

編集後記
熊本市現代美術館を読者のみなさまに少しでも知っていただくために、2001年の開館イベントとして「アート・キッスレター」を発刊しはじめから、今号でなんと30号目を発行することができました。これもすべて、本紙の取材や撮影に快く応じてくださった地元のアーティスト・文化人の皆様方の温かいご支援あってこそのことと感謝しております。
開館してようやく4周年を迎えたところですが、10月14日付の日本経済新聞における「公立美術館実力調査」で、中規模館部門で全国2位の評価をいただきました。「熊本に現代美術館があるね、行ってみたいね」と熊本の皆様、全国の

- 執筆一覧
*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。
東城昌山
Akiko Sakamoto(熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩葵
Aki Ashida(熊本市現代美術館学芸員)
竹田 茜
Akane Takeda(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆菜々
Nana Izu(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
Syozan Kaneshiro(書道家)
Tanso Moriyama(書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館主任学芸員)
荒屋江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)

発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.30
2006年11月発行(秋号) ◎無料◎
編集人/南島 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷
デザイン/(有)松永 社デザイン事務所
発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892